

属性を指す文の物・事態・場所的解釈可能性から 文法知識のあり方を考える

Exploring grammatical knowledge through the interpretative possibilities of property-predicating sentences

宇野 良子[†], 石塚 政行[†]
Ryoko Uno, Masayuki Ishizuka

[†]東京農工大学
Tokyo University of Agriculture and Technology
ryokouno@cc.tuat.ac.jp, ishizuka@go.tuat.ac.jp

概要

言語の本質は思考かコミュニケーションかという議論は現在でも続いている。また、文という単位の本質について思考的側面（判断）とコミュニケーション的側面（報告）があるとする立場が日本語研究にはある。本稿は、認知類型論的な立場から、日本語の文の解釈についてのアンケート調査を行い、一つの文に判断的（物的）解釈と報告的（事態・場所的）解釈がどのように共存しているかを、属性を指す文を中心に明らかにした。

キーワード: 思考とコミュニケーション, 言語類型論, 文, 属性叙述, 認知言語学

1. 問題提起

言語進化的な観点などから、言語は思考のためのツールか、コミュニケーションのためのツールか、あるいはその両方かという議論が長らくなされているが、まだ決着はついていない[1, 6, 13]。一方で、文という単位の本質について、思考的側面（判断）とコミュニケーション的側面（報告）が同時に存在しているとする立場がある[10, 14]。本研究は、このような文の見方の根拠となるようなデータを、まずは日本語で、さらには通言語的に得ることを目指している。

筆者らの考えでは、この問題を扱うには、属性を指す（属性を叙述する）文に注目することが有効である。言語類型論的に見ると、物・事態（出来事）・場所を叙述する文とは異なり、属性を述べる文には専用の形式がなく、物・事態・場所を指す文のいずれかの形式が流用される[15]。認知言語学の立場から[11]、これら複数の叙述形式には、それぞれに対応する意味あるいは捉え方があるという仮説が立てられる[8]。物的捉え方は分類という判断、事態的・場所的捉え方は事態や場所の報告であるとみなすことができる[8]。さらに、人間の認知のあり方が世界の言語の類型に反映されてい

るとする認知類型論的な立場[2]からは、属性専用の叙述形式がどの言語にも見られないのは、人間の属性の捉え方が一つに決まらないからであると考えられる。

本稿は以下の3つの問いに答えることを目的とする。

- (1) a. 属性の捉え方の違いは何によるのか。Stassen [15]が提案するように属性の恒常性によるのか、あるいは属性としての典型性[4, 5]や、その他の要因によるのか。
- b. 日本語の属性を叙述する文には2種類の異なる叙述形式がある（第2節参照）。この形式の違いは捉え方に反映するか。
- c. 物・事態・場所を叙述する文にも、複数の捉え方があるか。

2. 属性の叙述形式

属性の叙述形式は、物の叙述を流用する名詞型、事態の叙述を用いる動詞型、場所の叙述を使う副詞型の3種に分けられる。日本語の属性を指す文の述語となる語は、形容詞・形容動詞・動詞・名詞などがありうるが、形容詞・動詞は動詞型、形容動詞・名詞は名詞型に分類される[15]。どの形式で叙述されるかは、属性の意味の違いによるのではなく、歴史的経緯に由来する[17]。一方で、バスク語のように、属性が恒常的か一時的かで、名詞型と副詞型が使い分けられる言語もある。また、フィンランド語、中国語、ワスキア語のように1つのタイプの叙述形式しかない言語もある[15]。

表1 属性を指す文の叙述形式のタイプ

	名詞型	動詞型	副詞型
日本語	X	X	
バスク語	X		X
フィンランド語			X
中国語		X	
ワスキア語	X		

3. 調査

様々な属性を指す日本語の文について、3つの捉え方に対応する3つの解釈文が、それぞれどのくらい適切かを問うアンケート調査を行った。回答者は日本語母語話者の大学院生210人である。表1に掲げた25文を対象とし、各解釈の適切さを4段階で尋ねた。例えば、「先生の目は黒い」という文に対して、(2)の3つの解釈を提示した(物的解釈の「～ものに分類される」という部分は、主語に応じて「～人に」[文12, 13, i, ii, iii], 「～ことに」[文14, 15, 18, 19]と変更した)。(2a)が物的、(2b)が事態的、(2c)が場所的な捉え方に対応する。各解釈の適切さは、(3)の4つの選択肢から一つを選択する形とした。(3a)から(3d)の順に、1, 2, 3, 4点として点数化した。

- (1) a. 先生の目は黒いものに分類される
b. 「先生の目が黒い」という事態が起きている
c. 先生の目は黒い状態にある
- (2) a. 全く適切でない
b. あまり適切でない
c. やや適切である
d. 非常に適切である

表2 アンケート対象文(属性)

		対象文	タイプ	叙述形式	典型性	恒常性
1	A	先生の目は黒い	色	動詞	1	1
2	A	(徹夜して)先生の目が赤い	色	動詞	1	0
3	B	この家は小さい	大きさ	動詞	1	1
4	B	この腫瘍は(まだ)小さい	大きさ	動詞	1	0
5	A	この車は新しい	新旧	動詞	1	0
6	B	この絵はきれいだ	評価	名詞	1	1
7	B	(魔法のおかげで12時までは)シンデレラの服はきれいだ	評価	名詞	1	0
8	A	この鉛筆は硬い	物理的特性	動詞	0	1
9	A	(冷凍庫から取り出した)このバナナは硬い	物理的特性	動詞	0	0
10	B	この犬は速い	速度	動詞	0	1
11	B	(アイテムの効果がある間は)マリオは速い	速度	動詞	0	0
12	A	先生はとても親切だ	人間の性質	名詞	0	1
13	A	先生は(今日はやけに)親切だ	人間の性質	名詞	0	0
14	B	アメリカ大統領に会うことは難しい	難易	動詞	0	1
15	B	(今日は会議が多くて)先生に会うことは難しい	難易	動詞	0	0
16	A	この鳥はあの鳥に似ている	類似	動詞	0	1

17	A	(トリミングをして今は)この犬はあの犬に似ている(が、毛が伸びれば違いがはっきりする)	類似	動詞	0	0
18	B	太陽が西から昇ることはありえない	蓋然性	動詞	0	1
19	B	(今日は気温が高いので)雪が降ることはありえない	蓋然性	動詞	0	0
20	A	ライオンはサバンナに多い	数量	動詞	0	1
21	A	(異常気象で今年は)田んぼにイナゴが多い	数量	動詞	0	0
22	B	この駅は学校に近い	位置	動詞	0	1
23	B	(今日は)キッチンカーは正門に近い	位置	動詞	0	0
24	A	このページがこの論文の最後だ	順序	名詞	0	1
25	A	(今日は)この歌がプログラムの最後だ	順序	名詞	0	0

対象文の述語が表す属性は[4, 5]に基づき選んだ。[4, 5]は、世界の言語の形容詞が表す属性を色、大きさなど13のタイプに分類し、形容詞になりやすいかどうかで階層化した。色、大きさ、新旧、評価は形容詞になりやすく、属性として典型性が高い。それ以外の属性は比較的典型性が低い。また、各属性タイプについて、恒常的な性質を表す文と、一時的な状態を表す文を用いた。「新しい」だけは、常に新しいものというの原理的に存在しえないと考え、1文のみを用いた。

回答者の負担を軽減するため、アンケートを属性タイプによって表1のとおりA(13項目)とB(12項目)の2つに分割した。その際、属性としての典型性が高いものと低いものが同程度含まれるように分けた。Aの回答者は108人、Bの回答者は102人である。

これらの属性を述べる文に加えて、AおよびBの両方で、各解釈を代表する述語を用いた文についても同様の質問を行った。表3のとおり、物的述語は「先生だ」、事態的述語は「歩いている」、場所的述語は「学校にいる」を用いた。恒常性については、典型と考えられる値(物は恒常的、事態・場所は一時的)のみを対象とした。

表3 アンケート対象文(物・事態・場所)

	対象文	述語	叙述形式	恒常性
i	太郎は先生だ	物	名詞	1
ii	太郎は(今)歩いている	事態	動詞	0
iii	太郎は(今)学校にいる	場所	副詞	0

4. 結果

属性の叙述形式、典型性、恒常性の違いにかかわらず、物的解釈と場所的解釈はほとんどの場合に適切と

評定された。物的解釈の中央値は4（四分位範囲2～4）、場所的解釈の中央値は4（四分位範囲3～4）であった。事態的解釈は、中央値は3だが、四分位範囲は1～4であった。

属性の典型性による各解釈の評定の異なりは比較的小さかった。場所的解釈では、典型性にかかわらず、中央値は4（四分位範囲3～4）であった。物的解釈では、典型性にかかわらず、中央値は4であったが、典型性=1の場合四分位範囲3～4、典型性=0の場合は四分位範囲2～4であった。ただし、事態的解釈では典型性=1の場合、中央値2（四分位範囲1～4）に対し、典型性=0の場合は中央値3（四分位範囲2～4）であった。

一方、属性の恒常性の違いによって、各解釈の評定は異なっていた（図1）。特に、事態的解釈の評定は大きな違いを見せた。恒常性=1の場合、中央値2（四分位範囲1～4）に対し、恒常性=0の場合は中央値4（四分位範囲2～4）であった。物的解釈では、恒常性=1の場合、中央値4（四分位範囲3～4）に対し、恒常性=0の場合は中央値3（四分位範囲2～4）であった。場所的解釈では、いずれの場合も中央値は4であったが、恒常性=1では四分位範囲2～4であったのに対し、恒常性=0の場合は外れ値を除いて常に4と評定された。

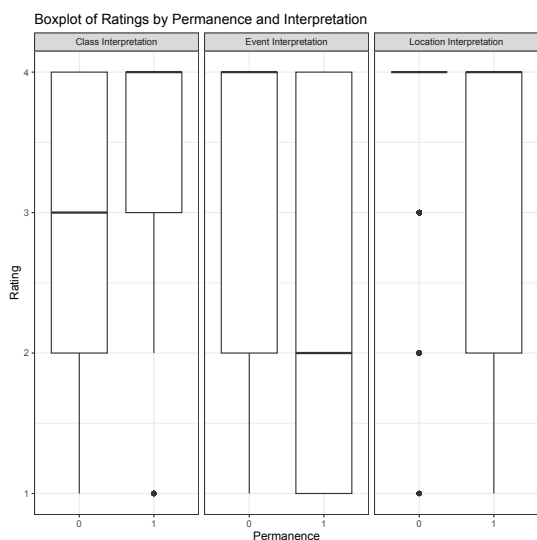


図1 解釈と恒常性ごとの評定の分布

文の叙述形式による各解釈の評定の異なりは小さかった。場所的解釈では、叙述形式にかかわらず、中央値は4（四分位範囲3～4）であった。事態的解釈でも、叙述形式にかかわらず中央値は4であったが、動詞的形式（形容詞および動詞）では四分位範囲1～4に対し、名詞的形式（形容動詞および名詞）では2～4であった。物的解釈でも叙述形式にかかわらず中央値は4

であったが、動詞的形式では四分位範囲2～4に対し、名詞的形式では3～4であった。

統計ソフトRを用いて、3つの解釈と典型性の2つの値との各ペア、恒常性の2つの値との各ペア、および2つの叙述形式との各ペアについてウィルコクソンの符号順位検定を行い、ボンフェローニ法により補正した。まず、典型性について、場所的解釈における有意差は見られなかった（ $T=4516, p=0.346$ ）。物的解釈における差は有意であった（ $T=5225, p=0.011$ ）。事態的解釈においては非常に有意な差が見られた（ $T=11351, p=6.92e-5$ ）。次に、恒常性については、いずれの解釈でも非常に有意な違いがあった（物的解釈： $T=278, p=3.92e-28$ 、事態的解釈： $T=16615, p=4.74e-29$ 、場所的解釈： $T=12694, p=3.25e-22$ ）。最後に、叙述形式について、場所的解釈（ $T=4892, p=0.591$ ）と事態的解釈（ $T=9949, p=0.974$ ）における有意差はなかった。一方、物的解釈については有意差が見られた（ $T=5225, p=0.010$ ）。

各解釈を代表する述語を用いた文の結果は以下のとおりであった。まず、述語の違いにかかわらず、全ての解釈がほとんどの場合に中央値が4となった（図2）。例外は、場所的述語に対する物的解釈（中央値3、四分位範囲は2～4）と、物的述語に対する事態解釈（中央値2、四分位範囲は1～3）であった。次に、統計ソフトRを用いて、3つの解釈と恒常性の2つの値との各ペアについてウィルコクソンの符号順位検定を行い、ボンフェローニ法により補正した。恒常性=1は物的述語、恒常性=0は事態的述語および場所的述語である。いずれの解釈でも非常に有意な違いがあった（物的解釈： $T=388, p=7.86e-15$ 、事態的解釈： $T=11607, p=1.36e-25$ 、場所的解釈： $T=2956, p=1.45e-10$ ）。

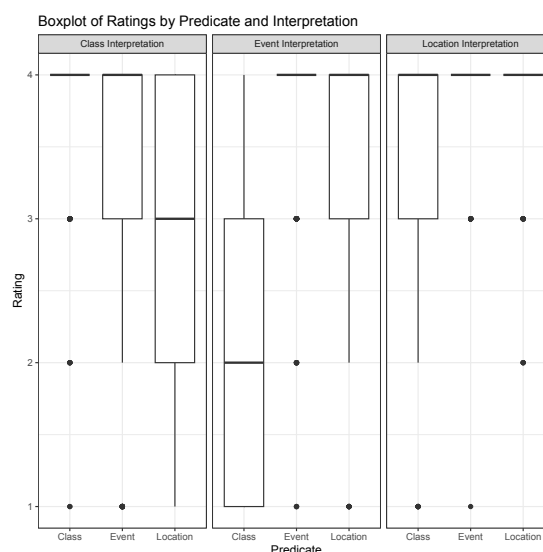


図2. 解釈と述語タイプごとの評定の分布

5. 議論

調査の結果, (1) で掲げた問いへの答えは次のとおりとなった。まず, (1a) の捉え方の違いの要因として, 典型性 (形容詞になりやすいか否か[4, 5]) にはよらないことがわかった。また, 大まかには, 一部の言語の叙述形式に反映しているように[15], 恒常性の違いに対応することが示された。ただし, 厳密には, 「新しい」の例から, 定められた時間のスコープ内で継続しているか否かが意味解釈を決定していると言える。

次に (1b) だが, 叙述形式によらず, 複数の捉え方がなされていた。言語ごとの叙述形式のタイプの差は, 属性に対する捉え方の可能性には反映されないことが示唆される。

三つ目として, (1c) については, 属性を指す文だけではなく, 物・事態・場所を叙述する文でも, 制限があるものの, 複数の捉え方が可能であるとわかった。

本研の意義としては以下の3点が指摘できる。まず, 日本語研究での属性叙述と事象叙述という区分をめぐって, 述べ方の違いの本質性と連続性に関する議論が続いている[9, 12, 16]。本研究の主たる目的ではないが, 物的解釈と事態・場所的解釈の度合いを各表現についての計量により, この問題に貢献できる可能性がある。

さらに, 認知言語学的な観点からは, 平叙文という抽象度の高い構文を検討するのに本研究が役立つ。物的捉え方を反映する名詞型の叙述形式は, その名のおり典型的には名詞を述語とする文である。また, 名詞の本質的な機能は事物の「分類」であるとされる[19]。このような分類は外界には存在せず, 心の中にしかない。もちろん, 外の世界の事象を指し示すカテゴリー化[11]のような分類は, 名詞だけでなく動詞や副詞によっても行われる。しかし, 上位・下位カテゴリー間の階層的な分類を行うのは名詞である。これらのことから, 属性を指す文で可能な3つの捉え方には, 外界についてのもの(物・事態・場所的)と内面についてのもの(物的)の2種類があると言える。このような理解を前提として, 本稿では第1節でも述べたように, 物的捉え方は分類という判断, 事態的・場所的捉え方は事態や場所の報告であるとみなし, 分析を行った。今後, 本稿の調査法を応用することによって, 平叙文という抽象度の高い構文の使用に個人差があるか否かを示すことができるだろう。これは, 個人差に注目して文法的知識のボトムアップな性質を明らかにしようとする認知言語学の研究[3]の一例となる。

最後に, 文の思考的側面(判断)の側からコミュニケーション的側面(報告)を見ている立場があるが[10,

14], 逆に共同注意に着目し, コミュニケーション的側面から思考的側面との連続性を見る研究もあり[7, 18], この2つのアプローチの接続を強めることに本研究は寄与したと言える。

謝辞

本研究は科研費 21K12603, 24K16048 の助成を受けています。また, 研究を進めるにあたり, 萩澤大輝氏, 田中太一氏, 氏家啓吾氏, 山泉実氏にご協力いただきました。ありがとうございます。

文献

- [1] Clark, A. (1997) *Being there: Putting brain, body and mind together*. Cambridge: MIT Press.
- [2] Croft, W. (2016) Typology and the future of Cognitive Linguistics. *Cognitive Linguistics* 27 (4), 587–602.
- [3] Dąbrowska, E. (2018) Experience, aptitude and individual differences in native language ultimate attainment. *Cognition*, 178, 222–235.
- [4] Dixon, R. M. W. (1977) Where have all the adjectives gone? *Studies in Language* 1(1), 19–80.
- [5] Dixon, R. M. W. and A. Y. Aikhenvald (eds.) (2004) *Adjective Classes: A Cross-linguistic Typology*. Oxford: Oxford University Press.
- [6] Fedorenko, E., Piantadosi, S.T. & Gibson, E.A.F. (2024). Language is primarily a tool for communication rather than thought. *Nature* 630, 575–586.
- [7] 本多啓 (2003) 「共同注意の統語論」山梨正明 (他編) 『認知言語学論考 No.2』 ひつじ書房 199–229.
- [8] Ishizuka, M. and Uno, R. (2022) Analyzing property predication from the perspective of evolutionary linguistics. *Proceedings of the Joint Conference on Language Evolution 2022*: 348–350.
- [9] 影山太郎 (編) (2012) 『属性叙述の世界』くろしお出版
- [10] 川端善明 (2004) 「文法と意味」北原保雄 (監修) 尾上圭介 (編) 『朝倉日本語講座 6: 文法 II』 58–80.
- [11] Langacker, R. W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- [12] 益岡隆志 (1987) 『命題の文法』くろしお出版
- [13] 岡ノ谷一夫・藤田耕司 (2022) 『言語進化学の未来を共創する』 ひつじ書房
- [14] 尾上圭介 (2001) 『文法と意味』くろしお出版
- [15] Stassen, L. (1997) *Intransitive Predication*. Oxford: Oxford University Press.
- [16] 鈴木彩香 (2022) 『属性叙述と総称性』花鳥社
- [17] 上原聡 (2002) 「日本語における語彙のカテゴリー化」大堀壽夫 (編) 『認知言語学 II : カテゴリー化』 81–103.
- [18] 宇野良子・池上高志 (2003) 「ジョイントアテンション/予測と言語」山梨正明 (他編) 『認知言語学論考 No.2』 ひつじ書房 157–197.
- [19] Wierzbicka, A. (1986) What's in a noun? (Or: How do nouns differ in meaning from adjectives?), *Studies in Language*, 10(2), 353–389.